



東京の会通信

No.247

2013年3月1日号
(隔月1日発行)

発行：公的骨髓バンクを
支援する東京の会
〒162-0065 東京都新宿区
住吉町10-8 第1菊池ビル302号
TEL：03-3354-6377
(FAX兼用)



<http://www.marrow.or.jp/tokyo/>
e-mail:marrow_tokyo@yahoo.co.jp

定価 100 円

突然の悲報、市川團十郎さん逝く

2月3日、突然の訃報にボランティア関係者は驚きと悲しみに包まれました。白血病を発症し、3度にわたる過酷な闘いを乗り越えて舞台に復帰され、患者支援活動にも熱心に取り組んでおられた、全国骨髓バンク推進連絡協議会会長で、歌舞伎界の重鎮、市川團十郎さんが、肺炎のため亡くなりました。團十郎さんは、患者やドナーを国立劇場の歌舞伎公演に招待してくださいました。その時の思い出や、團十郎さんへの感謝の言葉を、3名の方からお寄せいただきました。

■奇跡の復活を遂げた團十郎さん

2005年5月歌舞伎座公演中、急性前骨髄球性白血病で倒れられた市川團十郎さんは、寛解導入療法で寛解に入り、10月復帰されましたが、翌年再発、2006年1月自家末梢血幹細胞移植を受けられ、5月歌舞伎座の舞台に復帰されました。2007年3月にはパリ・オペラ

座で初めての歌舞伎公演を大成功させました。

しかし、その年7月、MDS（骨髄異形成症候群）を発病して入院され、今度は血縁者間の骨髄移植を受けて10月に退院、翌年1月の国立劇場の新春初舞台で復帰されました。普通ではとても考えられない強い生命力を発揮されました。

私たちは2009年11月国立劇場のご招待に夫婦で応募して、はじめて生の歌舞伎の舞台を拝見しました。私は歌舞伎という古い伝統的衣装、分りにくい台詞で退屈なものと思っていたのですが、それがとんでもない誤りであることが分かりました。所作や台詞は時代を超えた人間への共感と風刺に満ちていました。

もう一つ感じたことは歌舞伎俳優さんの舞台がとても重労働ではないかということでした。花道の出入りを始め、重い衣装を着けて飛んだり跳ねたり、見得を切ったり、その動作が現代劇より大きく体力が要りそうです。大病を患われた市川團十郎さんに「お疲れ」が溜まらなければ良いかと懸念したことを思い出します。
(新田恭平)

■楽屋でもお元気そうだった團十郎さん

2009年11月私たちは国立劇場の歌舞伎を見に行きました。

世界に誇る日本の芸能だと言われてもなかなか見に行く機会はなく市川團十郎さんが骨髄移植で良くなり



楽屋にて招待された患者さんやドナーさんと

日本骨髓バンクの登録患者と検査済登録ドナー (平成25年1月末日現在)

	ドナー(全国)	ドナー(東京)	患者(全国)
登録者累計	426,735	56,447	37,841
12-1月登録分	6,315	643	497
12-1月抹消数	3,575	399	—
実質登録増	2,740	244	—

患者とドナー登録・適合状況(1月末日現在)

ドナー登録受付者数(累計)	570,226人
ドナー登録抹消者数(累計)	143,491人
二次検査適合ドナー数(累計)	200,060人
実質登録患者実数(現在)	3,054人(国内1,640人)
HLA適合患者数(累計)	30,686人(患者累計数の81.1%)
非血縁移植実施数	15,150例(12-1月実施186例)

れたのを機に患者さんやドナーを招待して下さったのです。

演目は『外郎売』『傾城反魂香』です。どちらも團十郎さんの十八番ですが、『外郎売』には長い長い台詞があり、ここが聞かせどころです。團十郎さんは闘病後うまくこの台詞が言えず、苦勞しているTV番組を見ましたが、この日の舞台では完璧な演技と台詞で、大喝采を浴びました。

終了後私たちは楽屋に案内されて、お話しすることが出来ました。あの優しいお顔と立ち上る気品、病後とは思えないお元気な様子で私たちと歓談、握手も写真もどうぞどうぞと気安く応じて下さいました。

中村勘三郎さんといい、市川團十郎さんといい、歌舞伎界を背負っていくべき方がこのように相次いで亡くなられたことを、深く哀しみ、心よりご冥福を祈ります。(中谷光子)

■團十郎さん、ありがとうございました

僕が初めて團十郎さんにお逢いしたのは2009年11月に招待していただいた歌舞伎の時でした。僕自身も移植から約1年が経った頃で、團十郎さんの迫力ある演技に移植後でも元気になるという勇気をいただきました。その後も年賀状のやり取りやSNOW BANK PAY IT FORWARDでも色々と相談させていただいた時もありました。

團十郎さんがお亡くなりになった今、團十郎さんの思いを形にする活動を通して、移植を受けても元気になる事を世に発信し続け、これから移植を受ける患者さんの勇気になる様に邁進したいと思います。團十郎さん、本当にありがとうございました。(荒井善正)

今年も選手の走りに感動 箱根駅伝

【田町】

■ランナーの姿に圧倒

正月2日の早朝、仲間達の期待を一身に背負った勢いあるランナーの姿に私は圧倒されました。

今回初めて沿道応援に参加しましたが、第1区の団子状態から抜け出そうと駆け引きしている選手、置いていかれないように必死に食らいついている選手、それを沿道からまたラジオやテレビ越しにたくさんの力が支えている様子がその一瞬で伝わってきて、不覚にも自分はそこに入り込めませんでした。

来年こそはまた旗を持って沿道に立ち、今を頑張っているみんなの応援をしっかりとしたいと思います。

(鹿野充亮)

■10年目の応援 当たり前の毎日への感謝

1月2日、田町の朝、「つながれ、いのちのたすきリレー」に今年も参加しました。

箱根駅伝の沿道でバンクのボランティアさんが幟を立てると従兄弟から聞いたのは、息子(晃太)の闘病中、病室で迎えた2003年のお正月でした。残念ながら、その時のテレビ中継では見逃してしまいました。その後、東京の会大橋さんの思いを知り、病室のテレビで応援ののぼりを見たらきっと励みになると思いました。

その翌年から、私の一年は初詣で欲張りなお願いをすることと、箱根駅伝の応援で始まることになり、10年目の今年は、親子3人で参加しました。幟を持つての応援はあっという間に終わってしましますが、そこから始まる選手たちが懸命にたすきをつなげる闘い、毎年繰り広げられるドラマチックな展開を見て、すっかり箱根駅伝のファンになっていました。

先日は團十郎さんの悲しいお知らせが駆け巡りましたが、この10年間、私たちは当たり前の毎日を過ごせ



た幸せを改めて実感し、いのちの重みを考えさせられました。皆様に支えられいただいた元氣、幸せに感謝し、次へつなげる東京の会の活動に参加させていただこうと思っています。(名川一史)

【宮ノ下】

■「志村大輔基金」への募金呼びかけ

2013年も1月2日、3日と箱根駅伝の活動で新年の始まりです。2日の往路は御成門に大谷貴子さんとブルデンシャル生命から60名の方が参加され、田町、宮ノ下にもたくさんのボランティアが集合します。

私は箱根宮ノ下に行きました。富士屋ホテルの前で全国協議会が用意した幟を立て、応援に集まった大勢の人たちにチラシとティッシュを手渡しました。

今回は「志村大輔基金」への募金のお願いです。去年39歳の若さで天に召された志村大輔さんの遺志を受け継ぎ、医療費助成を行うための基金です。毎年、志村さんのご家族と一緒にここで、骨髄バンク普及の活動が続けてきました。大輔さんの亡き後、今年もご遺族の皆さんと大声をあげて、募金の協力を呼びかけました。この日、箱根は強風が吹き、芦ノ湖の遊覧船も

休止した程で、5区出場の選手たちも走るのは大変だったと思います。

寒さに冷えた体を富士屋ホテルのビーフシチューを食べて、身も心も温まり、風邪もひかずに帰りました。
(大塚礼子)

■初めて参加して

1月2日私は箱根駅伝の応援のため宮ノ下に向かいました。電車の中もそうですが町全体が一体化していて、富士屋ホテル前での選手の名前を皆で呼ぶ応援など、初めて見る光景にテレビでは味わえない雰囲気を楽しんでいました。

今年の箱根は強い風に悩まされ、その苦境の中を走る選手全員を心から応援しました。宮の下での活動の中で一番印象に残ったのは昨年亡くなられた志村さんのご家族のことでした。骨髓バンクPRを呼びかける姿には心打つものがありました。



次の日3日には田町駅前に応援に行きました。宮の下と同じく隣の方々とすぐに打ち解け、右隣には血液内科の先生親子がいらっしやって親近感がわきましたし、左隣の方は骨髓バンクののぼりを見上げ関心をもっていただけたように思いました。

私は初めてこの活動に参加しましたが、来年も是非参加したいと思います。
(櫻井洋子)

箱根駅伝寄付金贈呈式&團十郎さん追悼

1月21日、プルデンシャル生命保険(株)静岡支社にて箱根駅伝・骨髓バンク普及啓発活動に対しての寄付金贈呈式が執り行われ、この活動の発案者としてお招きを受け出席して参りました。全国協議会からは村上副理事長が来られて、プルデンシャル生命保険(株)代表取締役社長のジョン・ハンラハン氏より「病氣と闘っている患者さんの役にたてて下さい」と、日本語での挨拶とともに、白血病患者支援基金への寄付金目録を受け取りました。

プルデンシャル生命保険(株)では、社員の450名以上が骨髓バンクヘドナー登録をしていて、既に21名の方が骨髓提供を経験されています。この静岡支社にもドナー経験者が2名いらっしゃいました。

12年前、17本の幟旗を友人と箱根の沿道に立てました。今、「命のタスキリレー骨髓バンク」と記された幟旗をたくさんの人達が手にしています。8年前、プルデンシャル生命保険(株)前社長の三森裕さんが、「お正月に病室でドナーが現れることを待っている患者さんの励みになれば……」という、この活動の主旨に賛同し、社員の方に声をかけてくださり、幟旗も作成して頂き、約80名の社員の方たちと箱根駅伝の沿道で患者さんに思いを届ける為に幟旗を手活動して下さい

ました。今年も三森さんは、川崎近辺の沿道で参加されていました。命をつなげる、その思いを伝える箱根駅伝での活動は、患者さんをはじめ多くの人に届いていることと思います。

今年、ひとつ残念なことがありました。この箱根駅伝寄付金贈呈式に全国協議会の会長・市川團十郎さんが参加されなかったことです。ご存知のことと思いますが、2月初旬に肺炎の為に永眠されました。昨年、都内での贈呈式では穏やかな笑顔で参加され、「私も移植を受けた患者です。このご寄付は患者代表として、ありがたく受け取ります」と挨拶をされていたのが、とても印象に残っています。また、控え室では、歌舞伎の海外公演の話やシェイクスピアの話で小生と少し盛り上がりました。本来なら今月3月に初めてのシェイクスピア劇「オセロ」を上演している予定でした。見る事が出来ずにとっても残念な気持ちです。

しかし、芸や情熱はご子息の海老蔵さんをはじめとする後輩達に、崇高なボランティア精神は多くの人々に受け継がれていくと信じています。

心よりご冥福をお祈りいたします。合掌。

(大橋一三)

心のこもったご寄付ありがとうございました。(2012.12.16~2013.2.15)

河村朝子さん 10,000円/藤井奈保子さん 7,000円/峯直法さん 2,000円/山本重人さん 2,000円
幾見泰宗さん 7,000円/小林由佳さん 3,000円/幸川はるひさん 5,000円/大谷巻枝さん 7,000円
若木 換さん 21,500円/丸尾悦子さん 10,000円/伊藤史郎さん 3,000円/末廣正和さん 7,777円
仁野明人さん 2,000円/小松美穂さん 7,000円/中嶋一雄さん 12,000円/大貫洋二さん 10,000円
東海林のりさん 5,000円/中谷哲郎・光子さん 10,000円/西郷京子さん 10,000円/懇親会有志 3,600円
佐野啓子さん 2,000円/今村久美子さん 3,000円/匿名 5,000円/匿名 10,000円/匿名 46,500円

お寄せいただいたご寄付のうち、会費未納の会員からは会費(年3,000円)を差し引いて掲載させていただきました。

2度目の提供 人と人とのつながりを感じて

大垣航介さん

人と人との縁というのは、本当に不思議なものだと、つくづく感じます。2度目の骨髄提供を終えて半年ほど経ちますが、私の骨髄を名前も顔も知らない方が受け取ってくださったことについて、今でも実感がわきません。それでも、患者さんやそのご家族から手紙をいただき、喜びを共有できたことは本当に幸せに思います。手紙を見返す度にお会いしたことのない患者さんと私は確かに繋がっているのだなあと、感じています。

私が骨髄バンクに登録をしたのは、献血ルームに置かれている骨髄バンクのパンフレットをたまたま見かけたことがきっかけでした。小説やドラマなどで「骨髄移植」という言葉は知っていましたが、細かいことは何も知りませんでした。また、登録が献血のついでに簡単に出来る、ということから興味を持ち、登録をしました。もともと献血に行ったのも、何か人の役に立てたらいいな、という思いからで、骨髄バンクの登録もその延長のような、気楽な気持ちでした。

私自身、骨髄提供を行うことについては気楽に考えていましたが、心配そうなのはむしろ両親の方でした。全身麻酔を行い、後遺症が残るリスクもあると知った時には複雑そうな表情を浮かべていました。しかし、私の意思を尊重し、1度も「やめなさい」と言うこと無く送り出してくれたことには、今でも感謝しています。

登録半年後に初めてドナー候補に入りましたが結局提供には至らないということが何度か繰り返されました。登録から2年後にようやく最初の提供が決定し、「やっときたか」と、安心と身が引き締まるような気持ちになったのを、覚えています。そして最初の提供からさらに2年後、もう1人の患者さんへ骨髄を提供することができました。

同じ骨髄提供でも最初と2回目では違いがありました。特に印象に残っているのは、痛みの度合いとカテーテル（尿を出すための器具）を抜くタイミングでした。最初の採取では、採取直後から採取した腰部に鈍痛があり、採取した週は歩くときにも痛みを感じていたほどでした。しかし、2回目の採取では採取当日から痛みをあまり感じず、翌日は歩いて多少の違和感がある程度でした。これは、採取量の都合からか、皮膚に針を刺した後が4カ所あったことに対し、2回目の時には2カ所になっていたことが関係していると思います。

カテーテルを抜くタイミングは、病院によっても違うようです。最初の病院では採取中に抜いてくれました。しかし、2回目の病院では採取したその日はベッド上で絶対安静だったため、カテーテルははいたまま

までした。痛かったり常に尿意があったりで、採取した部位よりもそっちの方が気になる程でした……。今としては、貴重な体験と思えるようになりました。



私が提供した方は2人共、40代の男性だと伺いました。仕事でも家族の中でも、中心的存在として活躍されており、病気を発症したことにより、環境が一変されたことと思います。病気や治療の副作用による苦しみを乗り越え、今では病気になる前の生活に戻り、ご家族と幸せに過ごされていることを、ただただ祈るのみです。

現在の基準ではドナーになるのは2回と決まっているため、私はもうドナーになることは出来ません。登録されている方の中には、骨髄提供する機会に恵まれなままの方もいらっしゃるそうなので、私は幸運なのだと思います。

登録をしてからあつという間の5年間で、もう骨髄バンクと関わる事が出来ないのかと思うと、少し物悲しいような気持ちもありました。そんな中、今回この体験記を書かせて頂いたのも、不思議な縁からでした。私が在学する看護学校に、骨髄バンクの創設者である大谷貴子さんが講演にきてくださったのです。ご自身が病気にかかったお話から骨髄バンク設立までの話をして頂き、私が献血ルームで骨髄バンクのパンフレットを目にしたのも、患者さんへと提供ができたことも、大谷さんや協力された方々の尽力あつてのものだったのだと、改めて感じました。

骨髄バンクに登録をした当時は、医療とは関係のない大学に通っていましたが、最初の骨髄提供が決まった時は看護師を志して看護学校に入学する目前でした。そして在学中に、2度目の骨髄提供がありました。卒業を目前にした今、こうして体験談の依頼を頂いたのも、何かの縁だと感じています。

ドナーになったことに対して「すごいね」と言われることがありますが入院中も手術中もゴロゴロと寝てばかりいた身としては、実感が全くありません。すごいのは、辛い治療をしながら待っていて下さった患者さんやそのご家族、そして私と患者さんを繋げるために奔走された、骨髄バンクの方々です。私も、ドナーになった立場として、これから看護師として働く立場として、まずは周りの人に自分の体験などを伝えながら、人と人がつながる活動に少しでも貢献していきたいと思っています。

偶然ではない？ 大垣くんとの出会い – 大谷貴子 –

骨髄バンクを介しての骨髄移植が15000例を突破しました。言い換えれば、15000人の方が、骨髄提供をしてくださったのです。どこにいらっしゃるかはわからないけれど、そんな方々に毎日、感謝をしている私です。

そして、ある日、某看護学校で講演をしていました。医療スタッフの方々への講演は、どうしても、感謝に始まり感謝に終わる……そんな感じになります。そして、講演を聞いてくださっている看護学生の一人が、ドナー体験者だと知のです。しかも、二回も提供体験がありました。

15000分の1の出会い……いや、1500分の1の出会いにびっくりです。二回の提供体験は、約1割だと聞いています。日本中で1500人しかその貴重な体験の方はいらっしゃらないということです。

そんな方が、ひょっこりとそこに座っておられる。。。感動でした。そして、すぐに東京の会への原稿依頼をお願いをしたのです。

どんな出会いも偶然ではない、必然だ、とよく聞く言葉です。大垣くんとの出会いも必然だったのでしょうか。

二回の提供も、そして、原稿もありがとう！ 素晴らしいナースマンになられることと思います。期待しています！！

第6回公開フォーラム 法施行に向けて熱い議論

1月20日、全国骨髄バンク推進連絡協議会主催の第6回公開フォーラム「患者さんに最短で最適の医療を提供するために ～法施行後の新たな造血細胞移植医療の在り方を問う～」が開催されました。

今回のフォーラムは、昨年9月に成立した「移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律」を踏まえ、平成26年3月までに施行される新法を、造血幹細胞移植医療の新たな発展にどう生かしていくのか、議論するために企画されました。

基調報告では、まず、厚生労働省臓器移植対策室の間室長から、法律の概要、平成25年度概算要求内容などが報告されました。さらに、虎の門病院の谷口先生から、移植医療現場から見た課題について、全国協議会の四方田副理事長から、患者・ドナー視点から見た課題について、問題提起が行われました。

シンポジウム1「新法制定後の造血細胞移植医療」では、冒頭、名古屋第一赤の宮村先生から、伸び悩んでいる非血縁者間末梢血幹細胞移植の課題解決に向け、欧米で普及している新たなGVHD予防法や、医療機関間の協力によるドナーフォロー体制の整備などの取り組みについて報告がありました。

シンポジウムには、医師、ボランティア、患者、患者家族、ジャーナリストがパネリストとして出席し、それぞれの立場から発言されました。その中で、高齢化が今後ピークを迎え、対象疾患の広がりも含めて、移植ニーズの増大が予測されるなかで、ドナーの確保、治療成績の向上、患者への的確な情報提供など、様々な課題にどう対応していくのか、そのためのシステム改革も含めて議論されました。

シンポジウム2「移植患者さんならびにドナーを全

力でサポートするために」には、移植コーディネーター、臨床心理士（小児領域）、卵子保存の専門家、全国協議会副会長で東京の会顧問の野村正満さんが、パネリストとして出席しました。患者やドナーを支えている現場から、様々な取り組みや今後の課題について貴重な報告があり、野村さんからは、アメリカで法律に基づいて行われている患者支援策が紹介され、特に病初期の患者さんに対する情報提供の充実を求めました。

今回のシンポジウムでは、法律の成立をきっかけに、造血幹細胞移植の新たな将来像を描くための、様々な課題やヒントが示されました。

今後、法律の施行に向けて、造血幹細胞移植医療に関する国の基本方針や、施行細則に盛り込む内容等について、厚生科学審議会造血細胞移植委員会が毎月開催され、集中討議が行われます。審議会には移植患者やボランティアの代表も選出されており、全国協議会を含む関係団体へのヒヤリングも行われます。また、今回のフォーラムには残念ながら参加しなかった骨髄移植推進財団や日本さい帯血バンクネットワークにおいても、法の施行に向けて、それぞれ将来像検討委員会を発足させて議論が行われるようです。

全国協議会としても、審議会の議論に患者・ドナーの視点から意見反映していくこと、また、法律の枠組みを超えたシステム改革を含めた将来の在り方についても、国や関係団体に対して議論を呼びかけていくことが重要です。私たち東京の会も議論の動向に着目するとともに、全国協議会を通じて意見反映を図っていききたいと思います。（二見茂男）

東京ドナー登録会予定(3月・4月)

3月13日(水) 赤羽駅東口(北区)

3月16日(土) 新宿東口献血ルーム(新宿区)

4月9日(火) 日本橋もと(中央区)

4月18日(木) 電源開発(中央区)

4月20日(土) 国分寺駅西口(国分寺市)

編集者 雑記



▼このところ指導者のあり方が問われる話題がマスコミの紙面やニュース番組を賑わせています。中学校や高校の運動部の指導者の部員への体罰、その行き過ぎによる学生・生徒の自殺や引きこもり等の事件に端を発し、女子柔道日本代表チームの選手たちが監督・コーチから受けた暴力やパワハラを、全柔連を飛び越えて日本オリンピック委員会（JOC）に文書告発するまで発展してきています。

▼これらの問題の起きた原因を考えると、一つには指導者が指導される者の人権を認めず軽視していること、もう一つにはわが国のスポーツ指導の伝統的思想にある技はからだで覚えさせる、そのためには失敗したら叩いたり、小突いたり、見方によっては暴力とされる行為も許される、受ける側でもそれを愛の鞭として受け入れる風潮もあるのです。

▼伝統芸や伝統的技術を学ぶために、特定のお師匠さんの下に弟子入りして、生活をともにしながら技を習得する方式は師弟関係と呼ばれます。この場合には師匠と弟子の関係は極めて密接であり、指導は弟子の私生活にまで及ぶのです。中学・高校の部活の段階ではありえませんが、オリンピック日本代表チームのようなレベルになると、監督と選手個人の関係はこのような師弟関係に近い感情が生じることもありえます。

▼指導者は、選手個人の能力に応じて強いところを伸ばし、実戦でウイークポイントになるような技能や性格の弱いところの強化するために必要な指導を行なうでしょう。だからといって指導者が選手の人権を無視して言葉を含めて暴力を振るってはならないのです。指導者は誠意をもって説明し、やって見せ、やらせて教え、指導される選手は納得してトレーニングを実行するのが現代民主主義社会の指導の原則です。

▼指導のために暴力を使い、選手の身体に傷つけたり、心に傷つけたりしては反ってマイナスの結果を生みます。学校のいじめ問題、部活動を巡る指導者の暴力問題にしても、女子柔道代表選手たちの改善要望問題にしても、関係者の対応は、組織自己防衛の意図ばかり感じられなんとも歯がゆいものでした。指導者から暴力を受けた選手たちの立場に立つての視点が欠けているように感じます。

▼私たちボランティア団体においてもハラスメントが発生する危険性はあるのです。骨髄バンク支援を目的とするボランティア活動では会員は①血液難病を克服された患者さん、②患者家族 ③骨髄バンクドナー登録者 ④その他の活動主旨賛同者からなっており性別、職業、年齢はまちまちです。患者さんや患者家族、ドナー登録者の会員は多少骨髄バンクや血液の病気について知識を持っている人もいれば、そうでない人もいます。活動経験の長い者がそれを誇り、知識の豊富な人が知識不足の人を見下げるなどの行為をして相手を傷つけてしまうことはありうることです。

▼私たち東京の会は会員の活動について「活動計画を皆で決め、出来ることを、出来る時間に、自主的に参加する」ことを原則としています。年間活動計画と活動理念を定期総会で定め、月々の定例会で毎月の活動結果の報告と最近の活動予定を決めて参加者を募集するという運営方式です。月々の定例会への参加者は顔ぶれが決まってきたり、会員すべてのご意見を聞く機会がなかなかないことが悩みの一つです。決まったことをメーリングリストで流し、補っています。ディスカッションの場では皆が対等に発言できるよう運営し、声の大きな特定の人の意見で物事が決まるという弊害は起きないように配慮されています。

▼ボランティア組織を民主的に運営するのに最も必要なことは何か、性別、職業、年齢、考え方のまちまちな会員が、同じ目的のもとに集い活動することに、互に敬意をもって接し、時にはリーダーになり、時にはフォロワーとなってポジションチェンジをしながら活動することにあるのではないかと思います。(k)

東京の会 「3月、4月定例会」 のお知らせ

3月23日（土）、4月27日（土）午後5時30分より

会場：全労済東京・レインボー会館3階会議室

※JR新宿駅西口下車7分（新宿区西新宿7-20-8）

※地下鉄丸の内線西新宿駅下車1番出口徒歩2分

青梅街道新宿警察署向かい・「キャン☆ドゥ」角入り右側

※5月定例会予定・5月25日（土）午後5時30分より

定例会は 毎月第4土曜午後5時30分 から開催しています。

※昨年12月より第3土曜→第4土曜開催に変更になりました！

5月会報発送 「おりおり」のお知らせ

4月の「おりおり」はありません！

会報が隔月刊となったため、発送作業も奇数月のみとなります。

5月4日（土）13時00分より

※13時までは品川運輸さんが使用されています。13時以降にお越し下さい。

場所：品川運輸・4階会議室（品川区東大井2-1-8）

JR大井町駅徒歩8分・京浜急行鮫洲駅徒歩2分

※今お読みになっている「東京の会通信」を約1000部

折って封入して発送します。簡単な誰にでも出来る作

業です。いつも人手が足りません。どうかご協力を。

※2013年7月「おりおり」予定・7月6日（土）13時00分より

新しい方大歓迎です。お気軽においで下さい。お待ちしております。